

の長橋を渡り、田舎町には家並の揃ふて豊かな板柳村に入った。

板柳村のY君は、林檎園の監督をする傍、新派の歌をよみ文藝を好む人である。一二度粕谷の茅廬にも音づれた。余等はY君の家に一夜厄介になつた。文展で評判の好かつた不折の「陶器づくり」の油繪、三千里の行脚して此處にも滞留した碧梧桐「花林檎」の額、子規、碧、虚の短冊、與謝野夫妻、竹柏園社中の短冊など見た。十五町歩の林檎園に、撰屑の林檎の可憐なるのを見た。種々の林檎を味はふた。夜はY君の友にして村の重立たる人々にも會ふた。余はタアナア水彩畫帖をY君に贈り、其フライリフに左の出たためを書きつけた。

林檎朱に楹椀黄なる秋の日を

岩木山下に君とかたらふ

あくる朝は早く板柳村を辭した。岩木川の橋を渡つて、昨夜會面した諸

君に告別し、Y君の案内により大急ぎで舞鶴城へかけ上り、津輕家祖先の甲冑の銅像の邊から岩木山を今一度眺め、大急ぎで寫真をとり、大急ぎで停車場にかけつけた。Y君も大鰐まで送つて来て、こゝに袂を分つた。余等はこれから秋田、米澤、福島を経て歸村す可く汽車の旅をつゞけた。

紅葉狩

紅葉

嫁いで京都に往つて居る季の女の家を訪ふべく幾年か心がけて居た母と、折よく南部から出て来た寄生木のお新お糸の姉妹を連れて、余の家族を合せて同勢六人京都に往つた。松茸に晩く、紅葉には盛りにもちと早いと云ふ明治四十三年の十一月中旬。

京都に着いて三日目に、高尾槇尾梅尾から嵐山の秋色を愛づべく、一同車を連れて上京の姉の家を出た。堀川西陣をぬけて、坦々たる白土の道を西へ走る。丹波から吹いて来る風が寒い。行手には唐人の冠を見る様に一寸青黒い頭の上の頭をかぶつた愛宕山が、此邊一帯の帝王貌して見下ろし

て居る。御室でしばらく車を下りる。株立ちの矮い櫻は落葉し盡して、からんとした中に、山門の黄が勝つた丹塗と、八分の紅を染めた楓とが、何とも云へぬ趣をなして居る。余は御室が大好きである。直ぐ向ふのならびが岡の兼好が書いた遊びすきの法師達が、兒を連れて落葉に埋めて置いた辨當を探して居やしないか、と見廻はしたが、人の影はなくて、唯小鳥の囀る聲ばかりした。

車は走せて梅が畑へ来た。柴車を挽いて来るをばさんも、苜田をかへして居る娘も、木綿着ながらキッチンとした身装をして、手甲かけて、足袋はいて、髪は奇麗に撫でつけて居る。勞働が餘所目に美しく見られる。日あたり風あたりが暴く、水も荒く、軽い土が耳の中鼻の中まで舞ひ込む余の住む武藏野の百姓女などは中々、斯う美しくはして居られぬ。八年前余は獨歩嵐山から高尾に來た時、時雨に降られて、梅が畑の唯有る百姓家に跑

け込んで簀を借りた。山吹の花さし出す娘はなくて、婆さんが簀を出して呉れたが、「おべ、がだいなしになるやろ」と云ふので、余は羽織を裏返へしに着て、其上に簀を被り、帽子を傾けて高尾に急いだ。瓢箪など肩にして藝子と番傘の相合傘で歸つて来る若い男等が、「ヨウ、勘平猪打の段か」など、囃した。

いよ／＼高尾に來た。車を下りて、車夫に母を負ふてもらひ、白雲橋を渡つて、神護寺内の見晴らしに上つた。紅葉はまだ五六分と云ふ處である。かけ茶屋の一に上つて、姉が心盡しの辨當を楽しく聞いた。余等はまた土皿投げを試みた。手をはなれた土皿は、ヒラ／＼と宙返りして手もとに舞ひ込む様に此方の崖に落ち、中々谷底へは届かぬ。色々の色に焦れて居る山と山との間の深い谷底を清瀧川が流れて居る。川下が堰きとめられて緑藍色の水が湛へ、褐色の落葉が點々として浮いて居る。

「水を堰いて如何するのかな」

「水力電氣たら云ふてな、あんたはん」と茶を持って來たおばこのかみさんが云ふ。

余は舌鼓をうつた。

余等は高尾を出て、清瀧川に沿ふて遡り、槇の尾を経て、梅の尾に往つた。

梅の尾は高尾に比して瀟洒として居る。高尾から唯少し上流に遡るのであるが、此處の楓は高尾よりも染めて居る。寺畔の茶屋から見ると、向ふ山の緑青で畫いた様な杉の幾本に映つて楓の紅が目ざましく美しい。斯梅の尾の寺に、今は昔先輩の某が避暑して居たので、余は同窓の友と二三日泊りがけに遊びに來たものだ。其は余が十二の夏であつた。余等は毎日寺の下の川淵に泳ぎ、三度々南瓜で飯を食はされた。村から水瓜を買ふて

来て、川に浸して置いて食つたりした。余は今記念の爲に、川に下りて川水の中から赤い石と白い石とを拾つた。清瀧川は余にとりて思出多い川である。根尾に居た年から八年程後、斯少し下流愛宕の麓清瀧の里に、余は脚氣を口實に、實は學課をなまけて、秋の一月を遊び暮らし、ミゼラブルばかり讀むで居たことがある。

梅の尾から余等は廣澤の池を経て嵐山に往つた。廣澤の池の水が乾されて、鮎や、鱒が泥の中にはたたくして居た。

嵐山の楓は高尾よりもまだ早かつた。嵐山其ものと桂川とは舊に仍つて美しいものであつたが、川の此岸には風流に屋根は萩で葺いてあつたが自働電話所が出来たり、電車が通ひ、汽車が通ひ、要するに殺風景なものになり果てた。最早三船の才人もなければ、小督や祇王祇女佛御前もなく、お半長右衛門すらあり得ない。

「暮れて歸れば春の月」と蕪村の時代は詩趣満々であつた太秦を通つて歸る車の上に、余は滿腔の不平を吐く所なきに悶々した。

斯く云ふ自分も其仲間だが、何故我日本國民は斯く一途になるであらう乎。彼は中々感服家で、理想實行家である。趣味の民かと思ふたら、中々以て實利實功の民である。東叡山を削平して、不忍の池を埋めると意氣込み、西洋人の忠告によつて思ひとまつた日本人は、其功利の理想を盛に上方に實行して居る。億萬圓にも代へられぬ東山の洞をくりぬいて琵琶湖の水を引張つて見たり、鴨東一帶を煙と響と臭に汚してしまつたり、狭い町内に殺人電車をがたつかせたり、嵐山へ殺風景を持たむたり、高尾の山の中まで水力電氣でかき廻はしたり、努力、實益、富國、なんかの名の下に、物質的偏狂人の所爲を平氣にして居る。心ある西洋人は何と見るだらう乎。

京都、奈良、伊勢、出来ることなら須磨明石舞子をかけて、永久日本の美的博物館たらしむ可きで、其處に煙突の一本も能ふ可くば設けたくないものである。再び得難い天然を破壊し、失ひ易き歴史の跡を一掃して、其結果に得る所は何であらう乎。殺風景なる境と人と、荒寥たる趣味の燃え屑を残すに過ぎないのではあるまい乎。

日本國は譬へば主人が無くて雇人が亂暴する家の様だ。邦家千年の爲にはかる主腦と云ふものがあるならば、斯様な馬鹿げた仕打はせまい。余は日本を愛するが故に、日本が無趣味の邦となり果つるを好まぬ。余は京畿を愛する故に、所謂文明に亂暴されつゝある京畿を見るのが苦痛である。

義仲寺

三井寺で辨慶の力餅を食つて、湖上の風光を眺める。何と云つても琵琶湖は好い。

「彼が叡山です。彼が比良です。彼處に斯う少し湖水に出つばつた所に青黒いものが見えまじやう——彼が唐崎の松です」

余は腰かけを離れて同行の姉妹に指した。時計を見れば、最早二時過ぎて居る。唐崎の松を遠見で済まして、三井寺を下り、埠頭から石山行の小蒸汽に乗つた。

丁度八年前の此月である。今朝鮮に居る義兄と、余は同車して唐崎の松に往つた。彼は夫婦仲好の呪と云つて誰でも探すと笑ひつゝ、松に攀ち上

り、松葉の二對四本一頭に括り合はされたのを探し出してくれた。それから車で大津に歸り、小蒸汽で石山に往つて、水際の宿で鯉と蜆の馳走になり、相乗車で義仲寺に立寄つて宿に歸つた。秋雨の降つたり止むたり淋しい日であつた。

斯様な事を彼が妹なる妻に話す間に、小蒸汽は汽笛を鳴らしつゝ、湖水を滑べつて、何時見ても好い水から湧いて出た様な膳所の城を掠め、川となるべく流れ出した湖の水と共に鐵橋をくゞり、瀬田の長橋を潜り、石山の埠頭に着いた。

手荷物を水畔の宿に預けて、石山の石に靴や下駄の音をさせつゝ、余等は石を拾ひ、紅葉を拾ひつゝ、石山寺に詣つた。うど闇い内陣の寶物も見た。源氏之間は嘘でも本當にして置きたい様な處であつた。余等は更に觀月堂に上つた。川を隔て、薄桃色に禿げた雞冠山を眺め、湖水の括れて川

となるあたりに三上山の蜈蚣が這ひ渡る様な瀬田の橋を眺め、月の時を思ふて良久しく立去りかねた。

秋の日は用捨なく傾いた。今夜は宇治ときめたので、余等は山を下ると、川畔の宿にも憩はず、車を雇ふた。二人乗が二臺。最早上方でなければ滅多に二人乗は見られぬ。姉妹は生れてはじめてである。

姉妹を乗せた車は先きに、余等三人を乗せた車は之につゞいて、瀬田川の岸に沿ひつゝ、平な道を馬場の方へ走る。日は入りかけて、樺色に睡じた雲が一つ湖天に浮いて居る。湖畔の村々には夕けぶりが立ち出した。鴉が鳴く。粟津に來た時は、並樹の松に碧い靄がかゝつた。

「此れがねえ、木曾義仲が討死した粟津が原です」

と余は大きな聲して先きの車を呼んだ。ふりかへつた姉妹の顔も、唯ぼんやりと白かつた。

車は一走りして、燈火明るい町の唯有る家の前に梶棒を下ろした。

「何だ」

「義仲寺どす」

余は呆氣にとられた。八年前秋雨の寂しい日に來て見た義仲寺は、古風な巷に嵌まつて、小さな趣ある庵だつた。

余は舌鼓うつて、門をたゝいて、強て開けてもらつて内に入つた。内は眞闇である。車夫に提灯を持て來させて、妻や姉妹に木曾殿とばせをの墓を紹介した。

外には汽關車の響や人聲が囂々と騒いで居る。

宇治の朝

宇治に着いたのが夜の九時。萬碧樓菊屋に往つて、川沿ひの座敷に導かれた。近水樓臺先得月、と中井櫻洲山人の額がかゝつて居る。

此處は余にも縁淺からぬ座敷である。余の伯父はすぐれた大食家で、維新の初年こゝに泊つて鰻の蒲焼を散々に食ふた爲、勘定に財布の底をはたき、淀川の三十石に乗る錢もないので、頬冠して川堤を大阪までてく／＼歩いたものだ。伯父の血をひいた余とても御多分に洩れぬ。八年前の秋、此萬碧樓に泊つた余は、霜枯時の客で過分の扱ひを受け、紫縮緬の夜具など出された。御馳走も伯父の甥たるに恥ぢざる程食ふた。食ふてしまつたあとで、墓口を覗いて見た余は非常に不安を感じた。そこで翌朝宿の者に

は遊んで来ると云ひ置いて、汽車で京都に歸つた。少し都合もあつて其日は行かれず、電報、手紙も臆劫だし、黙つて打置き、あくる日になつて宇治に往つた。萬碧樓では喰逃げが歸つて來たと云ふ顔をして、茶代も少し奮發したに關せず、紫縮緬の夜具は雲がくれて、あまり新しくもない木綿の夜具に寝かされた。主の方では無論覺えて居る由もない。余は獨笑坪に入つた。

腰硝子の障子を立てたきり、此座敷に雨戸はなかつた。二つともした燭臺の百目蠟燭の火は瞬かぬが、白い障子越しに颯々と云ふ川瀬の響が寒い。障子をあけると、宇治の早瀬に九日位の月がきら／＼碎けて居る。ピツ／＼ピツ／＼千鳥が鳴いて居る。

朝起きて顔を洗ふと、余は宿の襦袍を引かけ、一同は旅の着物になつ

て、茶のます見物に出かけた。宇治橋は雪の様な霜だ。ザクリ／＼下駄の二の字のあとをつけて渡る。昔太閤様は此處から茶の水を汲ませたものだ、と案内者の口まねをしつゝ、彼出張つた橋の欄間によりか、つて見下ろす。矢を射る如き川面からは、眞白に水蒸氣が立つて居る。今も變らぬ柴舟が、見る／＼橋の下を伏見の方へ下つて行く。朝日山から朝日が出かゝつた。橋を渡つてまだ戸を開けたばかりの通圓茶屋の横手から東へ切れ込み、興聖寺の方に歩む。美しい黄の色が眼を射ると思へば、小さな店に柚子が小山と積むである。何と云ふ種類か知らぬが、朱欒程もある大きなものだ。旅先ながら看過し難くて、二錢五厘宛で五個買ひ、萬碧樓に届けてもらふ。

興聖寺の石門は南面して正に宇治の急流に對して居る。岩を截り開いた琴坂とか云ふ燈道を上つて行く。左右の崖から紅に黄に染みた槭が枝をさ

しのべ落葉を散らして、頭上は錦、足も錦を踏むで行く。一丁も上つて唐風の小門に來た。此處から來路を見かへると、額縁めいた洞門に劃られた宇治川の流れの斷片が見える。金剛不動の梵山に跣座して、下界流轉の消息は唯一片、洞門を閃めき過ぐる川水の影に見ると云ふ趣。心憎い結構の寺である。

豪駝師が剪裁の手を盡した小庭を通つて、庫裡に行く。誰も居ない。尾の少し缺けた年古りた木魚と小槌が掛けてある。二つ三つたゝいたが、一向出て來ぬ。四つ五つ破れよと敲く。無作法の響がやつと奥に通じて、雖僧が一人出て來た。別に寶物を見るでもなく、記念に晝はがきなど買つて出る。

雲上から下界に降る心地して、惜しい燈道を到頭下り盡した。石門を出ると、川邊に幾艘の小舟が繋いである。小旗など立てた舟もある。船頭が

上つて來て乗れとすゝめる。

「如何だ、舟で渡つて見やうか」

「えゝ、渡りませう」

一同舟に乗つた。

川上を見ると、獅子飛び、米漣など云ふ難所に窘められて來た宇治川は、今山開け障るものなき所に流れ出て、弩をはなれた箭の勢を以て、川幅一ぱいの勾配ある水を傾けて流して來る。紅に黄に染めた上流兩岸の山は、碧い朝靄を被て、山蔭の水も千反の花色綸子をはえたらん様に、一たび山蔭を出て朝日が射すあたりに來ると、水も目がさめた様に麗々と光り渡つて、滔々と推し流して來る。瀬の音がごう／＼／＼、ざあ／＼ざあ／＼と川面一面に響く。

「好いなア」思はず聲をあげる。

船頭は軋々と櫓の響をさせて、ほゞ山形に宇治川を渡す。

「何て綺麗な水でしやう」妻は舷側の水を両手に掬ひ上げて川を讚める。鶴子が真似る。

平等院の岸近く細長い島がある。浮島と云ふさうだ。島を蔽ふ枯葎の中から十三層の石輪塔が見える。

「あの塔は何かね、先には見かけなかつた様だが」

「近頃掘り出したンどす。寶塔たら云ふてナ、あんたはん」

と船頭が説明する。水は早し、川幅は一丁には越えぬ。惜しと思ふまに渡してしまつて、舟は平等院上手の岸についた。

舟賃を拂ふて、其處に三つ四つ設けられた茶店の前を過ぎて、美しい紅葉を拾ひつゝ、余等は平等院に入つた。

嫩草山の夕

奈良は奠都千百年祭で、町は球燈、見せ物、人の顔と聲とで一ぱいであつた。往年泊つた猿澤池の三景樓に往つたら、主が變つて、名も新猫館と妙なものに化けて居る。うんざりしたが、思ひ直して、こゝに車を下りた。

茶一碗、直ぐ見物に出かける。

上方客、東京つ子、藝者、學生の團體、西洋人、生きた現代は歴史も懐古も詩も歌も蹂躪して、鹿も驚いた顔をして居る。其雜沓の中を縫ふて、先づ春日祠に詣でた。田舎みやげの話し草に、若宮前で御神樂をあげて、ねぢり廊の横手を通ると、種々の木の一になつて育つて居る木がある。寄木、と札を立て、ある。大阪あたりの娘らしいのが、「良平さんよ」と云

ふ。お新さんがお糸さんと顔見合はせて莞爾した。お新さんは窃と其内の椿の葉を記念の爲にちぎつた。

嫩草山の麓の茶屋に來た頃は、秋の日が入りかけた。草履をはいた娘子供が五六人、たら／＼と滑る様に山から下りて來た。

「如何だ、上つて見やうか」

「え、上りませう」

足の悪いお新さんと鶴子を茶店に残して、余は靴のまま、二人の女は貸草履に穿き更へて上りはじめた。

名を聞いてだに優にやさしい嫩草山は、見て美しく思ふてなつかしい山である。八年前の十一月初めて奈良に來た夕、三景樓の二階から紺青にけぶる春日山に隣りして、貂の皮もて包むだ様な暖かい色の圓滿とした嫩草山の美しい姿を見た時、余の心は如何様に躍つたであらう。丁度眺へたや

うに十五夜のまん丸な月が其上に出て居た。然し其時は遽たゞしい旅、山に上るも果さなかつた。今はじめて其懐を辿るのである。

霜枯れそめた矮い薄や荊萱や他の枯草の中を、人が踏みならした路が幾條か麓から頂へと通ふて居る。余等は其一を傳ふて上つた。打見たよりも山は高く、思ふたよりも路は急に、靴の足は滑りがちで、約十五分を費やして上り果てた時は、額も背も汗ばむで居た。頂はや、平坦になつて、麓からは見えなかつた絶頂が、まだ二重になつて背に控えて居る。唯一つある茶店は最早店をしまひかけて、頂には遊客の一人もなかつた。

余等は額の汗を拭ふて、嫩草山の頂から大和の國の國見をすべく眼を放つた。

夕である。

日はすでに河内の金剛山と思ふあたりに沈むで、一抹殷紅色の殘照が西

南の空を染めて居る。西生駒、信貴、金剛山、南吉野から東多武峯初瀬の山々は、大和平原をぐるりと圍むで、蒼々と暮れつゝある。此暮山の屏風の流に包まれた大和の國原には、夕けぶり立つ紫の村、黄ばんだ田、明るい川の流、神武陵、法隆寺、千年二千年の昔ありしもの、今生けるもの、總てが、夜の安息に入る前に、日に名残を惜むで居る。

余等は麓の方に向ふて、「お、い」と聲をかけた。一つの影が縁臺をはなれて、山をのぼりはじめた。それは鶴子を負ふた車夫であつた。やがて上りついて、鶴子は下り立つた。

余等は更に眺めた。最早麓に一人残つたお新さんの影もよくは見えない。直ぐ後の方でがさ／＼と草が鳴つたと思ふたら、夕空に映つて大きな黒い影が二つぬうと立つて居る。其れは鹿であつた。

足の下で、奈良の町の火が美しくつき出した。蜂の群れの唸吟の様な人

聲物音が響く。

ほうん！

麓の方で晚鐘が鳴り出した。其鐘の音に促がさるゝかの如く、鴉が啞々と鳴いて、山の暮から野の黄昏へと飛んで行く。

余等は今一度眼を平原に放つた。最早日の名残も消えて、眼に入る一切のものは蒼い霧に包まれた。

大和は今暮るゝのである。

みゝずのたはこと
黒い眼と茶色の目

—の引越について—

新橋堂 鈴助野村さん。

福永書店 一良福永さん。

私の「みみずのたはこと」並に「黒い眼と茶色の目」がこのたび生みの親なる私の同意の下に、野村さんの手から福永さんの手に移って世話をされるについては、悲喜相半ばすと云ったやうな感があります。

「みみずのたはこと」と云へば服部書店國太郎さんの蒼い顔がまさしく、と其處に見えて來ます。私は最初あの人の爲に「みみずのたはこと」を書いたのです。が、

悦んだあの人は書が出て九ヶ月目に消えてしまひました。服部さんの歿後一手に引受けて百版まで賣り弘めた野村さんの手を「みみずのたはこと」が今更離れると云ふは、嬉しい事ではありません。また私にとっては切腹の皮切りであつた「黒い眼と茶色の目」が血が滴り姿で出雲町から尾張町までのこゝ、煉瓦の通を引越して行くなども異な氣がします。

然し無常が原則で一切の物が動産である見地からは、書の複製權が時の都合で此れから彼に渡るのは普通の事ですし、眞實と愛が生命の有機體として書と云ふものを見る時は、境遇の變化は生命の成長に伴ふ自然の結果とも云へます。譬へば旅客が長途の瀛車を下りて、大洋の瀛船に乗り移るやうなもので其處に何の無理もありません。過去に向つては感謝があり、將來に向つては希望があるばかりです。

私は大正二年三月から大正九年九月までの間に於て「みみずのたはこと」の百版、大正三年十二月から大正九年九月までの間に於て「黒い眼と茶色の目」の二十六版

を賣り弘めた野村さんの熱心に對しあらためて感謝を表します。殊に野村さんが帝都の出版者も數ある中に、福永書店を擇んで該二書の世話役を讓つた事に對し、而して福永さんが快くこれを引受けた事に對し、私は深いよろこびを感じます。福永書店は私の「新春」と共に生れた書店です。「新春」は小さなものながら私が半生の總計サムトータルで、「みみずのたはこと」も「黒い眼と茶色の目」も要するに「新春」に達する道程の所産なので、野村さんが斯二書を福永書店に讓られたのは、是れ正に祝福された自然の導きでなくて何でありませうか？

私は今まさに新橋堂の瀛車を下りて福永書店の船に上らうとする私の二子に代つて、岸壁の方をふりかへつて、

「服部さん、おやすみ。」

「野村さん、長々ありがたう。随分御達者で」

と挨拶し、

「何分よろしく」
と福永船長に目禮します。

大正九年九月廿三日

武蔵野粕谷の里にて

徳富健次郎

70

百〇一版の巻首に

「みみずのたはこと」が此たび福永書店の手に移つて百〇一版を出すについて、
私は今昔の感に堪えぬものがある。

「みみずのたはこと」はもと／＼私が服部書店國太郎君の爲に書いたものである。約束をしてから四年待たせて、大正二年の春やつと世に出した。蒼い顔を崩して服部君は悦んでくれたが、書が出てから九ヶ月目「みみずのたはこと」が第三十二版を賣つて居る頃、著者の私が「死の蔭」の旅にさすらふて居る中、服部君は消ゆるが如く死んだ。

服部君の死後は新橋堂野村君の一手に「みみずのたはこと」は扱はれた。服部君

71

より野村君の關係が私には舊かつた。明治三十九年の秋、私が露西亞から歸るとやがて、野村君は新聞雜誌に散らばつて居る私の書き捨てを集めて出版の許諾を求めたが、私は拒絶して使者の眼の前で其切りぬきの綴ち込みを引裂いてしまふた。然し野村君は中々めげなかつた。服部君と共同で「みみずのたはこと」を引受くるに到つて君は初志の一半を貫ぬき、服部君の死後一手に「みみずのたはこと」を引受くるに到つて其熱心は正に酬はれたのである。大正二年三月から大正九年九月に到るまで、八年未滿の間に「みみずのたはこと」が百版を重ねたのは、何を云ふても野村君の熱心を推さねばならぬ。

その「みみずのたはこと」が今度福永書店の手に移つて百〇一版を出す。服部書店に生れ、新橋堂書店に長じた「みみずのたはこと」は更に福永書店に移つて其處に新しい運命を拓かうとして居る。流轉を悲しみ無常をはかなめば、一つの書店に

死なれ、一つの書店を後にする「みみずのたはこと」に涙無くてはかなはぬ。生命を信じ成長を悦べば、過去に向つては唯感謝、將來に向つては唯希望があるばかりである。

數多い帝都の出版者の中に就て、私は野村君が殊に福永書店を擇んで「みみずのたはこと」を譲つた事を喜ぶ。福永書店は私の「新春」と共に生れ出でた書店である。「新春」は小さいながらも私にとりては半生の總計である。「新春」は何處から生れる？土から生れる。私を「新春」に導いたのは土の生活である。私の土の生活の第一所産が「みみずのたはこと」である。「みみずのたはこと」を花とすれば、「新春」が實である。花が實になる、これ程自然な事があらうか。「みみずのたはこと」は「新春」の書店に於て當さに其行く可き所に行つたものと云はねばならぬ。更に縁起を云へば「新春」は「百〇一の歌」を以て結ばれて居る。「百〇一」の歌を

以て結ばれた「新春」の書店に移つた「みみずのたはこと」が百〇一版から始まるも面白い因縁ではあるまいか。生命はまことに環の端なきものである。私は「みみずのたはこと」が「新春」と共に尙讀まれんことを望む。

大正九年九月二十三日

徳富健次郎

復活百〇八版

「みみずのたはこと」の巻首に

大正十二年九月一日東京の大震大火で、銀座尾張町の福永書店も丸焼になり、同書店版の私の著書一切及び諸處に預けてあつた紙型の大部分が焼けました。

其緑の蔭に大震の日の半日を私共一家が避難した庭の山楓が、三日三夜東京横濱を焼いた焰の色の朱に染めかけた頃、ある日その楓を横に見る客室で、私と福永書店主人の間に左の會話が交はされました。

「先生、復活に着手したいと思ひますが、先生は何書からお始めになります？」

「君は何から出したい？」

「『みみずのたはこと』は如何でせう？」

「『みみず』『みみず』は好い。みみずは土の福音だ。すべては土からはじまる。」

『みみずのたはこと』からやらう。」

斯くて『みみずのたはこと』が最初に灰の中から甦る事になりました。

「みみずのたはこと」は私共が東京を去り村の人となつてから七年目の大正二年三月に出した土の生活の記録です。書きはじめは明治四十五年の六月、七月には明治天皇の崩御があつて明治四十五年は直ぐ今上の大正元年になり、元年が二年になると間もなく本書は出たので、これは私にとつて明治大正の過渡を記念の作物となりました。最初服部書店國太郎君の懇請にほだされて書き、後では新橋堂書店野村鈴助君が肩を入れ、「みみずのたはこと」が出て八月目に服部君が亡くなつた後は専ら新橋堂の手に扱はれ、大正二年から大正九年までの間に百版を重ねました。其後、新橋堂の都合で、私の承諾の下に「みみずのたはこと」は他の新橋堂版の私の小説「黒い眼と茶色の目」と共に「新春」の版元福永書店に譲られました。百〇一版から福永書店の手で出し、大地震の火に焼けたのが百〇七版、

復活が百〇八版であります。百八は舊を送り新を迎ふる除夜の鐘の數であるのも面白い。

初版は五號活字の四六版でした。第三十九版から縮刷六號になりました。復活の百〇八版は五號四六版に復します。本文にはあまり添削を加へません。但前版巻尾の北海道紀行「熊の足跡」、京都紀行「紅葉狩」の二文は、もとよりあらずもがなの蛇足だつたので、此機會に削除し、其あとに新に「讀者に」の一篇を書きました。それは「みみずのたはこと」が出た大正二年から今大正十二年にわたる十年間の私共の消息なり述懐なりで、即ちまた私共がみみずのたはことに捺く奥印であります。それから巻頭百〇一版の序を省き、斯新序を入れました。

挿畫は、前版の「書齋の窓から」、「門の前」、「蛙聲」、「勿來關跡」、「嫩草山」をぬき、「恆春園南面」、「門」、「鍬取りて」を加へ、他は舊による事にしました。

大正十二年十二月三十日

東京郊外

粕谷

恆春園に於て

徳富健次郎

みづのたわこと (新刊豫告)

『みづのたはこと』は、著者が過る六年間田舎に引込み、みづの眞似して、土ほじくりする間に、折にふれて吐き出したるたは言共をかき集めたるものなり。其内容には村落生活の即興寫生あり緻とるひまの偶感偶想あり、短篇小説見たやうなものあり、日記の斷片あり、長短の手紙あり、稀に村より這ひ出してのろくと旅しまわりたる紀行あり。著者居村の風物を撮影したる印畫數葉を挿みて、趣を助く。

みみずのたはこと (新刊)

過る六年間士の洗禮を受けて武藏野の孤村に鍛をとれる著者が、折に觸れ興に乗じて筆を走らせし即興のスケッチ、短篇小説、冥想、書翰、紀行等を集む。清新なる田園の小景、涙を含む笑に満てる物語、平淡の中戦慄す可き恐ろしき説話、詩化せられたる教訓、有象より無象に通ふ神秘の暗示、巻中に充滿す。都會住者は讀んで麥の穂末を渡り來る暮春の薰風の如き自然の氣息に接せよ。田舎に住む人は此に依りて新に吾周圍を見るの眼を開け。九葉の寫真版は、本文を助けて、説話の舞臺を讀者の眼前に躍如たらしむ。

みみずのたはこと (廿八版)

秋漸く深く自然も肅して人も自づから眞面目なる季節、燈下書に親しむ都門の讀書生も、短日を愛しむ地方の勤勞者も、課餘業間時に『みみずのたはこと』を把りて其一二節を誦し見よ、自己及び自己の周圍に對し恒に新にして親切なる或る啓示と情味と従つて力とを興へられん。

武藏野の土の産物みゝずのたはこと

武藏野の霜の中から抜け出した白い大根や紅い甘藷が盛んに都人士の口に入る季節となりました。新漬の澤庵に辛い舌鼓を打ちやきいもの甘いけぶりに頬をやく方々は練馬大根や川越蒔と同じく武藏野の土の産物なる『みゝずのたはこと』の一本を身近に具へて時々其一二葉を咀嚼し恒に眞に新たな生活の趣味を噛み出して下さい。

みゝずのたはこと (ポイント改版)

過る六年間土の洗禮を受けて武藏野の孤村に鍛をとれる著者が、折に觸れ興に乗じて筆を走らせし即興のスケッチ、短篇小説、冥想、書翰、紀行等を集む。

語に曰く 神は田舎を造り、人間は都府を作ると。著者は田舎を愛すれども、都會を捨つる能はず、心竊に都會と田舎の間に架する橋梁の其板の一枚たらん事を期すされば本書は信仰と趣味、理想と煩惱の間に徘徊徬徨せる著者が懺悔の一片とも見るべく、又多感多情の著者なるレンズを透かして印象せられたる田園生活の印畫とも見るを得べし。清新なる田園の小景、涙を含む笑に満てる物語、平淡の中戦慄すべき恐ろしき説話、詩化せられたる教訓、有象より無象に通ふ神秘の暗示、卷中に充滿す。都會住者は讀んで麥の穂末を渡り來る暮春の薰風の如き自然の氣息に接

せよ、田舎に住む人は之れに依りて新に吾周囲を見るの眼を開け。九葉の寫眞版は
本文を助けて説話の舞臺を讀者の眼前に躍如たらしむ。

刷縮み、ずのたはこと (七十四版)

日露役後戦勝日本の浮かれ心地を尻眼にかけて逸早く都門を去り、土の生活に入
つた著者が、大自然の直接教授を日々夜々に受けつ、目睹耳聞體驗心閱を筆にまか
せて書き留めた『み、ずのたはこと』は、大正初年に於ける土の文學の一名著とし
て已に七十四版を重ね、ます／＼新しい讀者を牽きつけつ、あります。四十年來空
想天を舞ひあるいた夢見がちの著者を否應なしに現實の大地に引きずり下ろし、潔
癖の彼に頭から土の洗禮を浴びせて有無を云はさず一切を愛せしめ、嘸をしても赤
面した小膽の彼を眞晝中生れたまゝの赤裸になつて堂々と大手をふつて濶歩する自
然男アダムにしてのけたは、何はともあれ土の生活の賜物で、其生活の最初の産物
が即ち『み、ずのたはこと』であります。

今帝都の西三里、人目には平凡きはまる粕谷の莊に自家の埃田を發見して、五十男が新春の驪喜に手の舞ひ足の踏む所を知らぬ快活の境地には如何にして達し得たでしょうか。

ピラミッドは一塊石ではありません。級々にして上る石の堆積です。『新春』の著者は、正に『みゝずのたはこと』の階段を登つて來たのであります。

『新春』の讀者にして初めて『みゝずのたはこと』を味ふべく『みゝずのたはこと』の讀者にして『新春』の喜を深く感ずることが出來ます。何となれば生命は共通、人生の味は歩々の汗と血と涙にして同時に歩々の春なる登攀にあるのですから。

みみずのたはこと (八十三版)

私が今後書きたいと思ふもの書かねばならぬものを私の力限り書き得たとするも『みゝずのたはこと』は矢張私に取つて可愛子であると思ふ。何故なれば之れは私が初めて大地に脚を立て、生活しはじめた其生活の最初の所産であるから。私は三年前の順禮行には一冊の自著も携へなかつたが今度は旅鞆に「新春」と縮刷「死の蔭に」と「順禮紀行」と而して縮刷『みゝずのたはこと』を入れて來た。

(世界週遊の途中に、著者白す)

みみずのたはこと (百〇一版)

百〇一版から「新春」と同じく福永書店で發行する「みみずのたはこと」は私が土の生活の第一所産で、私には煩惱子だ。「みみずのたはこと」あつて初めて「新春」がある。土の上に生活して生あり、死あり、而して復生ある生命の連鎖に人が繋がる限り『みみずのたはこと』は讀まるべきものだ。

大正九年十一月 著者記

みみずのたはこと (百〇五版)

著者が順禮紀行の旅から歸つて、武藏野に田園生活をはじめた最初の收穫。天にあこがれた靈魂が、はじめてしつかと大地に脚を立てた第一の人間記録。

復活した「みみずのたはこと」(百〇八版)

「先生、御本の復興にかゝりたいと思ひますが、先生は何からお出しになりますか？」

「君は何からやる？」

「『みみずのたはこと』は如何でせう？」

「みみず？——みみずは好い。あれは土の福音だ。すべての復興は土からはじまる。好、みみずからやらう」

著者と出版元と話の結果が復活第百〇八版みみずのたはことであります。

「みみずのたはこと」は著者が年四十にして初めてしかと大地に脚を立てた最初の生活記録です。大正二年の出版で、年を経る十一、版を重ねる百〇七、十萬餘部を

出して、いまだに凛々と生きて居ます。それは土に注がれた愛のしたゝりで、土は所謂地欠、而して「愛は何時までも墮つる事がない」からでありまじやう。前版は縮刷六號でしたが、復活版は最初に復へつて四六型五號とし、挿畫を新にし、卷末に著者の最近消息を報する一長文を添えました。「みみずのたはこと」に著者のつく奥印です。

定本「みみずのたはこと」に就て

一、底本及び校訂方針

○本書は、著者が最終の改訂版たる第百〇八版、即ち大正十二年秋の震災にて縮刷版焼失のあと、四六判に復歸改版せる、所謂復活版を底本とした。

○初版から縮刷版を経て復活版に至る、用字法假名遣ひその他、本の體裁等の推移を細かく吟味するは興味深きことであるが、今詳しく茲に爲すを得ない。概説すれば、初版には在來の著者獨特の用辭、慣用が相當に残されて居り、縮刷版になるに先つてそれらは大部分改められてゐる。第三十九版縮刷に際して、著者は、内容、文章、辭句に非常に手を加へた。最終の版が初版と異つてゐるのは殆ど總て此の時の著者の直しである。その後、判形活字號數の變更の爲、版の磨滅の爲、或は發行所變更の爲等の技術上の改版はあつたが、文章を直す事なく、震災迄つゝいた。前記發行所變更は第百〇一版でその版に初めて序文が附された(本書附録參照)。震災後の復活版に於てはその序文(本書附録參照)に斷つてある通り、本文には殆ど手を加へなかつた。その版に於て文章及挿繪の削除され且つ新に附加された事も亦同序文に見る通りである。また初版の四六判五號活字總振假名が縮刷版には六號活字半振假名となり、復活版はもとの大形に戻つたが、振假名丈は依然半振假名であつた。尙、縮刷版の中途に夾まれて四六判九ポイント活字の第六十

五版がある。内容は縮刷版と同一である。此のポイント版が何版迄出たか今詳かでない。第七十版はもとの縮刷版になつてゐる。概して版の進むに従つて、文法上の正用に統一されて来てゐ乍ら、稀に却つて中途から誤られたものもある。第百〇一版及復活版に特にそれが多く、殊に後者に、多数の俗字、愆字の混用されてゐるのは、當時震災後の未だ印刷設備の不備、活字の不足なりしを思はしむるものがある。

○本書は、文章、辭句、振假名の程度等一切復活版に據つた。

○著者の手許に遺された、「訂正用原本」(復活版假綴本)への著者の書き入れに據つて訂正を施した。

○また同じく著者の書庫に遺された第六十五版(前記ポイント版)への著者の書き入れに據つて訂正を施した。

○復活版に残された明瞭なる著者の癖は尊重保存した。

○復活版に於ける純然たる誤植は訂正する方針を執つた。

○誤脱の爲、意味の通じない所、及び行の最下端の句讀點の省略された所は、初版及び縮刷版に依つて訂正補填した。

○全然別義を有たない正字俗字の混用は、その普通なる正字に統一訂正した。但し現在普通用ひらるゝものを凡べて特殊なる正字に直すことはしなかつた。

○振假名假名遣ひの誤りの混用は、正用例に據つて統一訂正した。又誤れる一二例しかなくそれ

が著者の癖にも非ざるものは振假名に限つて之を訂正した。

○以上の如き方針の下に尙遠かに解決し難き例外あり。それらについては幸ひ終始著者の傍に在つて著者の仕事に參與せる夫人の裁斷を俟つて決定するを得た。

○上述の若干の訂正に由つて、本書は、復活版に於ける俗字混用、振假名假名遣ひの誤用を調ぶるよすがとはならないであらう。

一、附録について

○「みみずのたはこと」として一旦發表されたもので、復活版に際し、若しくはそれ以前に、省かれたる挿繪及文章を附録の第一とした。

○其の一、挿繪は復活版の序文に斷り書きせられた五枚で、「書齋の窓から」は巻頭、本文の直前に、「蛙聲」は「田圃の叢笠」の前にあつたものである。「門の前」の一枚は初版には無くて縮刷版に初めて加へられ、「故人に」のその記事(本書第十一頁)の對向に置かれたもの。「勿來」は『旅日記から』(本書附録)の「熊の足跡」中「勿來」の文中にあつたもので既に縮刷版に際して省かれたもの。「嫩草山」は同じく『旅日記から』の「紅葉狩」中「嫩草山の夕」の文中にあつたものであるが、復活版に於て『旅日記から』全體と共に省かれたものである。

○其の二、「蝶の語れる」は初め、『ひとりごと』の第七番目、「草とり」と「不淨」との間、初版第三四八頁にあつたものであるが、縮刷版改版に際して、偶然か、何等の斷りなく洩れしまゝ、

復活版序文（従来の経過について一通り述べられたる）に於ても説明を與へられず、最後の全集にも次の『旅日記から』は収録されたに拘らず、遂に逸せられてゐたものである。

○その三、『旅日記から』の「熊の足跡」十一篇「紅葉狩」四篇は復活版序文に見る如く、その版から著者が省かれしものである。今收むるに當つて體裁上、その標題『旅日記から』とのみあつた中扉を省いた。校訂は前項本文の方針に従ひ、底本もその方針に準じて著者の最終改訂たる縮刷版に據つた。但し組み方は本書の此の形の中へ、六號細字組みの縮刷の形式をとる事の不體裁を考へて「蝶の語れる」に揃へて初版の形式に従つた。

4

○附録の二は「みみずのたはこと」に關する著者の文章中、公にされたもののみを蒐集した。

○その一、發行所變更の際の引き札で、當時取扱書店及び各方面に配布されたもの。著者の文章の前後に兩書店主の挨拶のある小型十二頁のパンフレットである。校正は一切原文のまゝに據つた。

○その二、序文二篇は全集にも洩れ、右の引き札が却つて序跋の卷に收められた。それ／＼その序文が初めて附せられた第百〇一版及第百〇八版によつて校正した。

○その三、廣告文もそれ／＼の掲載紙・誌（著者の切抜帖「自著批評」）に據つて原文のまゝに校正し、年代順に排列した。同一廣告文の一部分を抄出せるもの、その要を摘んで並べしもの等は最初の全文を以て代表させた。

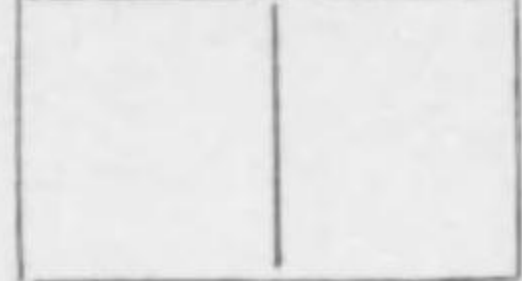
昭和八年五月一日印
昭和八年五月八日第一刷發行

みみずのたはこと

定價貳圓八拾錢

(大森製本)

版權所有



著者

徳富健次郎

發行者

東京市神田區一ツ橋通町三番地
岩波茂雄

印刷者

東京市神田區錦町三丁目十七番地
白井赫太郎

精興社印刷

發行所

東京市神田區
一ツ橋通町三番地

岩波書店

電話(33) 八八七番
九段(33) 〇三九番
振替口座 東京二六二四番

大正二年三月十日印
大正二年三月十三日發

刷行

大正三年六月二十五日 第三百九版發行

大正九年九月二十三日 第百〇一版發行

大正十三年六月五日 第百〇八版發行

昭和八年五月一日印

刷

昭和八年五月五日 岩波版第一刷發行

338
138

終